

## 函館の教育のあり方検討協議会（第2回）会議録

日 時	平成28年8月26日（金） 18:30～20:12
場 所	函館市役所本庁舎8階第1会議室
出 席	<p>委 員 田 中 邦 明（北海道教育大学函館校教授）          大 場 みち子（公立はこだて未来大学教授）          齊 藤 縁（北海道教育大学附属函館幼稚園副園長）          山 田 幸 俊（函館市小学校長会事務局長）          毛 利 繁 和（函館市中学校長会事務局長）          中 島 悟（北海道高等学校長協会道南支部長）          絹 野 重 治（函館市社会教育委員）          竹 内 正 幸（函館商工会議所事務局長）          井 上 実 香（公募）</p> <p>事務局 木 村 雅 彦（学校教育部長）          佐 藤 ひろみ（生涯学習部次長）          鶴 喰 誠（生涯学習部次長）          加 賀 重 仁（学校教育部学校教育課長）          柴 田 成（学校教育部学校再編・計画担当課長）          寺 本 公 彦（学校教育部教育指導課長）          小 松 将 人（学校教育部教育指導課指導主事）          村 上 貴 洋（学校教育部学校教育課主査）          松 本 大（学校教育部学校教育課主事）</p>
欠 席	委 員 中 村 和 代（函館市PTA連合会事務局員）
傍 聴	3名

## 1 開 会

出席者 9 名。過半数を超えているため、会議成立。

## 2 議 事

### (1) 函館市教育振興基本計画の基本的方向性について

(田中会長)

本日会議の次第に従いまして進めてまいりたい。それでは、議事の(1)「函館市教育振興基本計画の基本的な方向性について」だが、資料1「第1回検討協議会での前回の会議の主な意見」について事務局から説明をお願いします。

≪事務局より、資料1に基づき説明≫

(田中会長)

それでは、ここで大場委員に、前回ご欠席であったので、申し訳ないが、皆様初めてだと思うので、自己紹介と、委員の函館における教育に関する想いなどもお話しいただければと思う。

(大場委員)

はい。公立はこだて未来大学の大場です。前回欠席して申し訳ありませんでした。

私は、未来大学に着任したのは2010年で、7年目になる。私の仕事は、元は民間企業におり、コンピュータ関係の研究を7年半ほどやって、後に20年ほどIT関係のソフトウェアを開発するという部署におり、最終的にはマーケティングなどもやって、その後、未来大学に着任している。

産学連携というのを、ずっと業務的にはやっており、システム開発ということを中心に実践型の人材を育成するというのを、この6年間余りやってきている。そういう観点から、前回の皆さんの議論を見させていただいたが、その実践型のシステム開発で、主に軸を置いているのは、地域に役立つアプリケーションをつくる、地域に貢献するというのを主軸に置いている。その結果、学生たちは、地域の皆さんと非常によく接し、函館が好きになっていくという状況だ。こういう学生達を増やして、函館で働きたいという学生も出てきており、函館外からの導入の一つの手段として、非常に良い事例になるのではないかと感じており、前回の流れの中でも、函館の小学

生、小さい頃から函館を好きになる、函館学を学ぶなどの意見が出ていたので、それについては、非常に賛成であり、大学の学生達も地域に密着した学び、協働ということをやっていくことは良いと思っている。

中でも、地域住民の高齢者の方から子どもたちと一緒に学び、教え合うなどは、ひとつのソリューションではないかと感じている。

今日はその辺りも議論できればと感じている。

(田中会長)

大場先生ありがとうございました。

今、これで、前回からすべての委員のご意見を頂戴したことになる。

本日は、すごく難しいテーマかもしれないが、資料2「教育における多様性の尊重の視点」。先ほど、簡単に前回の報告があったが、これに基づいて、今日は是非、教育の多様性の問題にフォーカスし、皆様から御意見を頂戴していきたいと思っている。資料2の説明を事務局の方からよろしくお願いしたい。

《事務局より、資料2に基づき説明》

(田中会長)

本日の、多様性をどう教育の中で活用していくかという視点について、説明があった。4ページの最後のところが、今日の議論を進める上で認識しながら、話を進めていくべきことだと思う。函館の教育環境をどうしていくかについて。それから、その中で地域づくりの担い手・支え手、これを育む何か画期的な方策は無いのか。画期的なものがないといけないのだと思う。この2点をよく考えながら、議論を進めてまいりたいと思う。

今、学校のことの報告があったが、日本全体の中で、函館の教育が、学校教育がどうなっているのかという、資料の一節にあったが、例えば、幼児教育とか大学教育など様々な段階があったと思うが、まず、小学校がどうなっているのかというところ、私も実は学生と一緒に、この2年間、学童保育所の支援に入っていた。そこで、小学校の先生や学童保育所の先生ともよく話をした。

そこで、最近の子どもの変化が非常に語られていて、集中して何か物事に取り組む子どもが少なくなったと言っておられた。それから、落ちつきがないとかも言われていた。集中力がないとかも。言われてみれば、そういう子が結構、学生を悩ませていた。事実として。

そこで、山田委員が専門なので考えを伺いたいと思うが、私は前回からフランクにお話を、とずっと申しているので、日頃、感じられていることなどお話をしたい。先生方もいろいろ苦勞されていると思う。そういうことで、私は何か画期的なものを、今すぐということではないが、山田委員がお考えの子どもの変化や、学校の変化や、それから何か問題解決のヒントになるのであれば、問題そのものでも結構なので、是非、ご意見を頂戴したいと思う。

(山田委員)

資料2の2ページにあるように、現状ということで、本校も傾向的には、これにピッタリ当てはまっている。

今、学校の取組として行っていて、食育ということで進めてきたが、欠食で朝ご飯を食べてこないという子は、幸いにしてこの数年間では減少傾向、ほぼいなくなっていると思うが、食べている内容、献立に関しては、またそれとは別の話であって、どのようなものを食べているかというところまでは、ちょっと把握できていない。

それから、テレビの時間や、ゲームの時間、それから勉強は好きと言っているが、家庭学習の時間は短いという辺りは、そのとおり本校の特徴と函館の傾向は、似ていると感じている。あと、最近の子どもたちを見ていると、多様性、いろんな子どもがいる。資料2の(1)の4番にあるが、特別支援学級の児童生徒の増加もさることながら、そこまでいかないが、若干、個別の指導が必要な児童も増えていると思う。平成10年頃だったか、LDという言葉がでてきて、学習障がい傾向を持つ子どもということで、アメリカの数字が示されて、数パーセント、一桁パーセントということで、私はその時にその割合を聞いて、そんなにいるのか、というようなイメージだったが、この十数年の間に増えている状況を実感している。特に低学年の子どもたち、1年生として入ってくる子どもたちを見ると、そのような思いを強くしている。

先ほど田中会長からもあったが、集中して物事に取り組むことが出来ない、落ちつきが無い以外にも、しつけ以前の子ども、身につけておかなければならない態度が身につけていないなど、若干やはりこの20年、30年前とは、子どもたちの様子が大きく様変わりしているのではないかと思う。

(田中会長)

ご意見に関係して何か、小学校のお子さんがいらっしゃる方もいるかと思いますが、どなたかご意見があれば。井上委員から何かお願いします。

(井上委員)

職場で丁度少し前に発達障がいについての講演会、勉強会があり、我が校でも発達障がいで気になる子が、クラスで1人ぐらいずつはいるということで、担任の先生が、結構質問とかもされていた。一応、私立で、試験を受けて、学力があって入ってきているのだけれども、やはり友達とうまくやっていけないとか、ちょっと場の空気が読めないとか、そういう子がやはり増えている、目立つようである。それで、対応に困っているという担任の先生が結構おられて、ちょっと私はびっくりしたが、私達の学生の頃は、あまりそういう子はいなかったかなと思う。そういう子が目立つことであるが、その子のお母さん方の支援も結構していかなければいけないという話で、その子自身だけではなく、毎日関わっている保護者の方はもっと悩んでいると思うので、保護者にどう関わっていくかというのを、これから学校を挙げて考えていかなければいけないという会となった。

(田中会長)

ありがとうございました。

体の問題も学童の先生が言っていた。座れないというんですよ。そういう子は座った時に、背骨が曲がったまま座っていたり、座ってても、ぺたっと横になったり。筋力とか骨格のサポートとかが十分でないようなお子さんもおられる。安座の時の姿勢見てても、すごく猫背になっていたり、安座ができなくて、すぐ立ち上がってしまう子どももいるということを僕も実際確認している。

(大場委員)

それは何が原因なのだろうか。日常の生活なのだろうか、食事なのだろうか。

(田中会長)

食事もあるかもしれないし、どんな椅子に座っているか、ひよっとしたら、家ではずっと寝転びながら暮らしているのかもしれない。

(井上委員)

側弯の生徒もすごく増加傾向にある。コルセット付けたりしていたりする生徒もいる。

(田中会長)

体を固定したり，正座したりというのが，生活スタイルという中で失われてしまっているかもしれない。齊藤委員，いかがですか。

(齊藤委員)

本園では，昨年，子どもたちの運動遊びについて特化した研究をした。それは春に体力や運動能力を測り，それから半年，プログラムに沿って，子どもたちが活動をし，その後の秋に，どのような変化があったかということも含めた研究であったが，その中に，先程話にあった「座れない」，「筋力がない」，「体幹がしっかりとしていない」ということがあげられていた。そこで，体幹をしっかりとする運動を普段の遊びに取り入れたプログラムなどを行った。子どもなので，1回目と，それから2回目という風になると，コツも覚えて上手になるというところもあるかもしれないが，全ての項目において体力・運動能力が向上したということだった。その中では函館市の体育において，幼児から高等学校までの「函館スタイル」という体育の教育課程があるということを知って，体育部会から資料をいただき参考とし，幼児の運動と，その先の小学校，中学校とつながっていく上で，必要な運動のあり方や体幹を鍛えることということで研究し，若干ではあるが，効果があったと考えている。

それから話がずれるかも知れないが，今回，リオ・オリンピックで，とてもメダルが多かったのはどうしてだろうかという議論が，今いろいろされているかと思う。リオ・オリンピックのメダルが多いのは，もしかしたら，今批判されることが多い，ゆとり教育の賜物ではないか，つまり，ゆとり教育がオリンピックのメダルを多くすることにつながったのではないかと考える方もいるというのを，興味深く聞いていた。

つまり，その子どもの個性を伸ばすということが大事にされて，例えば勉強だけではなくても，スポーツ，スポーツ全般でなくても水泳とか，個性が認められる世の中で，子どもたちが運動し，育ってきたという経緯を耳にすると，その中で例えば体づくりということを考えた時にも，函館市の教育の中で，何か出来ることがあるのではないかと思っている。

(田中会長)

「函館スタイル」というのは，標準体操のようなスタンダードのようなものか？

(齊藤委員)

これは，私が参加した研究会の中で発表されたいたもので，函館市の保健体育の教育課程で「函館スタイル」というものがあったので，それを後ほどいただき，幼稚園

の方で紐解いた。

(毛利副会長)

研究会でそういうスタイルを作っていると思う。

(大場委員)

あまり普及はされていないのか？

(田中会長)

知らなかった。初めて聞いた。

幼小と来て、毛利副会長は中学校だが、今、「函館スタイル」、体育の話もあったが、今の文脈で言うと、どういうふうになるのか。

(毛利副会長)

「函館スタイル」の話か？

(田中会長)

スタイルも含めて、子どもの体の状況などどう考えているか？

(毛利副会長)

田中会長の方から、先ほど「暮らし」という言葉が出たが、その暮らしを目の当たりにすることが、最近多い。どんな暮らしかという、結構、想像を絶する暮らしをしている子どもが多い。先程、家庭の経済的な問題の話が出たが、要保護・準要保護の子どもは、3人に1人と言ってもいいくらいだ。そういう経済的な援助を受けているような状態。家庭の方に何かちょっと問題があっても、家庭訪問ではなかなかわからない。暮らしで、まず食べることについて言うと、ある子は、1週間3,000円渡すから自分で勝手にご飯をつくって食べなさいと言われたそうだ。子どもにとってこれは無理な話だ。親はほとんどいない。夜もない。という家が珍しくなくあたりする。そういう中で、子どもの暮らしは一体どうなってるんだろうっていったら、私達がいわゆるイメージするような、暮らしのイメージではなくて、もう好き勝手にできるわけだ。寂しいかもしれないが、それに慣れてしまうと、あとはもう自由。先ほど出たように、勉強は好きだが、家庭学習の時間は伸びないというのは、うちの学校でもずっと調査しているが、結局はスマホに費やしている時間が、どうしても自分

で改善できない状態にいる。それは何故かといったら、家族もそう、絆がそもそもなくて、誰も注意してくれないので、そういう状態が随分出てきてるなどぞっとするような感じにいる。

でも、そういう話が、学校によっては当たり前「その家もそうか、あその家もそうか」という状況で、それでも、子どもたちを見ると、子どもたちは学校でよくやってるなとつくづく思う。よくきちんと座ろうとし、よく勉強に参加しようとし、よく活動に参加しようとし、よく作品を作ろうとし、そういう意味では、昔の子どもだったら逆にグレていただろうなという感じがする。それが、最近頓に感じてることだ。

それから、体育の話、さっきの姿勢の話、それから「函館スタイル」の話だが、それらの話においても、中学校で見てると、非常に運動に熱心な子どもと、全く興味が無いというか、運動ができるような体でないから、その子は自信がない状態だ。動かすことが非常に苦痛になっている。だから、周りからどう見られているのか非常に気にしていると思う。中学校に入った時点で、もう結構、二極化している。ここにすぐ問題を感じる。だから、生涯というキーワードに当てはめると、もうすでに中学校あたりではもうそれが崩れるくらい二極化している。どの子も自分に合った運動を、好んでやればいいが、なかなかそういうふうにならない。もちろんタイプも違う子どもたちは、そういう運動が苦手な子に、多様性の話が今日テーマになっているが、その子に合った運動とか、授業でもそこまで個に対応しないと、授業にならない状態になっている。みんなと同じことしましょう、というのは、なかなか通じない場面も、学校では出てきている。だからジレンマだ。学校は本来ひとつの枠、そのベースをきちんとはめてから、もうすこし個性を伸ばしたりする。そのベースにはめること自体がもう、なかなか難しくなっているところはある。

それから、今日の話の中で出たのは、障がいですね。山田委員からも出ていたが、学級に1人なんてものではない、本当に。何故子どもの数が減っているのに、独特の雰囲気とか、考え方、行動をする子どもが増えているんだらうという、一種不思議な今、気持ちになっている。昔、文科省が出したとりあえずの数字で、6.3パーセントというのがあったが、やはり1割くらいには、1割超すとは言わないが、結構上がってきてるのではないかと思う。一時期は、教員の中でも、自分はちょっとそういう子の対応が苦手だとか、苦手でないとか話題にあったが、今はどこにいても必ずいるので、みんながやはり必要に迫られて、指導の仕方を身につけ始めている状況だ。

(田中会長)

「函館スタイル」は、通用するのだろうか。

(毛利副会長)

いや、どうだろう。とにかく、スタイル自体が私ちょっとわからない。それが、どういう段階が一番適切で、どこまで生涯にわたってというようなことが大事だろうけれども。中学校では、叱咤激励してやる場合もあるが、やはりその子に合わせたプログラムとか、その子にわかりやすい状態、いわゆる特別支援教育の考え方に基づいて対応しなければならず、食のことにしても、随分昔に比べたら、先生方が個に対応する頻度が増えているというのが、最近中学校にいて思うことだ。

(田中会長)

体育では、絹野委員が色んな活動をされてきていると思うが、今の子どもたちを相手に活動をされていると思うので、今の子どもたちの体力の問題でご意見をいただきたい。

(絹野委員)

体育というよりも、バレーボールは子どもたちも好きでやっているの、それが好きで来た子どもたちは一生懸命やっているし、また、バレーは、重力に逆らう難しいスポーツであるので、かなり練習しなければ上手にならない。そういう中で意欲的にやっている。そういう現状だ。

ただ、私は、体育の方でなくて、学力の問題でお話したい。国語・理科は同程度、算数・数学は、やや下回りというような、この部分の辺り。学校でも、先生方かなり努力はされていると思う。そういう中で、やはり学びのスタイルというか、子どもたち一人一人が自主的に学んで、そしてやはり子ども同士の関わりだとか、やり遂げた喜びなどを通して、自主的に学んで学力をつけていくという、学びのスタイルをある程度、完成させていくことが大事だろうと。

今、毛利委員の話を知ると、家庭環境がかなり悪い状況の中で、一律にそのように考えることが難しい状況下にあるかと思うし、また、先生方もそういう方向にむけて、かなり努力はされているだろう。そういうふうと思う。しかし、自主的な、主体的な問題解決の能力が、もし身につけていったとすれば、もう知識・理解注入的な、そういうようなものでなく、自らが開拓していく勉強の面白さという学びのスタイルを習得したとすれば、もっともっと学力は上がるのではないだろうか、私は考えて

いる。

先生方もそれに向かった努力はされているとは思いますが、学校全体が一律に、いわゆる主体的な学びをどう完成させていくかという、大変忙しい中で大変だとは思いますが、けれども。そういう意欲的な取り組みをすることによって、子どもたちの函館の学力はもっと向上するのではないかと、私は考えている。

(田中会長)

自主的なスタイルということか。

(絹野委員)

はい、問題解決能力。そういう形でいま考えていたところで、この学力の問題のところ。そういう学びができないかということで、努力はしていると思うが、なお一層の結束した先生方の力で、函館の教育を頑張ることによって、函館の学力が向上するのではないかと。

秋田あたりが全国で1位だって言われてるところあたりも、先生方が一生懸命であると同時に、家庭も一生懸命であるからだ。家庭環境がいい。だから、毛利委員の言う、家庭環境が悪い、かなり悪い状況の函館の中では、なかなか難しい部分があるのではないかと、そういう感想を持った。

(田中会長)

今、アクティブ・ラーニングっていうのがすごく言われていて、高等学校でも結構取り組んでいる学校あると思う。それで、中島委員は高等学校であるので、たぶん、もう既に取り組まれてご苦労もされてるのではないかとと思うが、ご意見いただけるか。

(中島委員)

まず、高校の方の特別支援の話だが、先程、井上委員の方から、いろいろ特別な支援が必要な子どもさんがいるという話があったが、全く、うちの学校も例外ではない。学力は非常に高い。ただ、友達関係だとか、生徒同士、それから生徒と教員のコミュニケーションがちゃんととれないという子どもが、やはりクラスに1人、2人、必ずいるのが現状だ。非常に学力は高いですので、ただそういう部分の指導をどうしたらよいかということだ。やはり先生方も悩む現状がある。これが1点目。

それから、問題点として、この後出てくるかもしれないが、インターネットの利用

だ。いわゆるスマートフォンの利用時間。これが非常に蔓延しているというのが現状だ。北海道高等学校学習状況調査は、毎年、1年生を対象にしており、今年も2月か3月に行われた。インターネットの利用時間だが、学習目的以外でインターネット・スマートフォン等を利用する時間として、6時間以上使っている、この6時間というのは1日あたりということだが、全国で12.5パーセントだ。さすがに本校はもう少し少ないが、6時間以上スマートフォンを使っているという生徒が12.5パーセントといたら、かなりの数だ。一番多いのが、2時間から3時間で、これが22.5パーセントということだ。我々が考えている以上に、スマートフォン等の利用が生徒に浸透している。家庭学習の時間と言っているが、現実的にこれだけスマートフォン等に使われている時間が多いわけであるから、なかなか難しいというところがあると思う。

話を戻すが、アクティブ・ラーニングの話だが、これは全教科というわけではないが、本校では英語の授業で行っている。かなりアクティブ・ラーニング的な要素を取り入れた授業になっている。従来の授業は、どちらかというと、英文法だとか、英作文だとか、そういうことが中心、リーディングもそうだが、読解とか中心になっているが、それを、ここ4、5年の間でずいぶん英語科の方で授業改革をして、要するに子どもたちの意欲とか、興味・関心とか、自分からなんとか話そうという意欲を持たせるといったような授業実践でやっている。そういったことが、いろんな積み重ねもあり、今年の3月、英語教育の文部科学大臣表彰を受賞することができ、現在、様々なところから視察に来られている。私も授業見ているが、単なる型どおりのペアワークだとか、グループトークなど、そういうのではなく、稚拙な表現でも自分の言葉で表現するということを大切にしながら、子どもたちから自発的に、自主的っていうか、そういうものを引き出そうっていう授業で、いろんな工夫をしているのが、英語科の取組だ。これが他の教科にも波及していけばと思いながらやっている。ひとつ、興味深かったのは、そういった授業ばかりやると、じゃあ実際にセンター試験とか、クリアできるのか。要するに受験の問題点があるのだが、今年のセンターの結果は、筆記の方でも全国平均よりも16点くらい高い。過去の実績から見ても、たぶん全国平均よりも高い点数になっている。英語科の先生が言うには、使う英語というのが、まず大事なんだと。使える英語をどんどん自分から使えるようになれば、必然的に自分が英語に対する興味・関心を持つようになって、そういったことが結果的にセンター試験等にも、成績として現れてくるのではないかと、そのような見方もしていた。

(田中会長)

今日は、多分、地域高等教育の話題になると思っていて、実は、私のスマートフォンの中に未来大の学生が開発した、まち歩きのソフトを入れている。

(大場委員)

「はこだてMAP+」ですね。

(田中会長)

大場委員は、そういったアプリなどの開発にずっと、取り組んでいますよね。

(大場委員)

高度ICTコースで取り組んでいるもので、市民も使えるものだが、観光のルート、「まちあるきマップ」というのがあるかと思うが、十数コースあり、それらが全部網羅されていて、さらに様々な観光スポットの情報、函館市がもっている情報、様々なデータをつなぎ合わせて、使えるようにしている。Linked Open Data。オープンデータは今、電子政府や各自治体で色々出していると思うが、「はこだてフィルムコミュニケーション」が出しているもの、「はこぶら」という函館市のサイトが出しているものなど、様々なデータをオープンデータ化して、繋ぎ合わせてつくっているものだが、そういう開発を通じて、技術も学ぶことができ、函館市のことも学んだり、好きになるきっかけというのもでき、皆さんが使っていたらそれをヒアリングしたりするというのも、非常に学びにつながっているところだ。PBL, Project Based Learning (課題解決型学習) ということ、これはアクティブ・ラーニングの一つであるが、チームで何々をする、チームでやるということ、非常にメリットがあると感じている。伸び代で言うと、リーダーが最も伸びて、スケジュールをつくったり、各メンバーがどういう状況になっているかという進捗確認をしたり、遅れてたり、できない人もいた場合にどうするというアクションを考え、指導するというような場面もある。指導するっていう言い方はおかしいかもしれないが、リーダーシップを利かせる、ファシリテーションをする、ということが非常に伸びにつながっている。あと、未来大学では、プロジェクト学習、PBLを1学年でやっているのもあるが、「はこだてMAP+」は、ピラミッド型の組織でやっている。それは結構有効だと思う。学部1年生から大学院2年生までの混成チーム。縦のつながり、先輩が後輩を教えるっていう、そういう仕掛けが非常にうまく機能しており、そこで学び合いが生まれている。また、漁師さんと協働しているチームもある。そうすると、漁師さんと会話して、

「こういうのが欲しいんだよ」など言われると、それを考える。考えた結果を、次に持って行く際のコミュニケーション、お客様と会話するために、会話の仕方を先輩に教わったり、持って行った結果として、周りから、「あれ良くなかったね」とか、「こういう風に言うよりこうの方がよい」とか、「いきなり直球勝負じゃだめだから、雑談してから話を進めるんだよ」なども話すことで、いわゆるコミュニケーション能力などもプラスになる。それから、プレゼンテーション力。そういうの作ると、いろんな場面で発表するっていう機会がある。未来大学だけでなく、まちづくりセンターなどでも、発表会を開催したりする。そうすると、相手によって言葉が伝わらないということが往々にしてある。そうすると、相手を見て言葉を変えたり、表現をより易しくしたりするので、Project Based Learningというのは、様々な意味で効果がある。授業だけでは、やはりシステム開発できない。そうすると、自らインターネットで調べる。そこにまた教え合いが発生する。新しいゲームを学ぶ、環境を学ぶという時に、勉強会を学生たちが自主的にやっていく。そのような仕掛けを教員は作っている。大学の中で上下になっているものを、もっと下につなげて、小学生にスクラッチでプログラミングを教えるというのをやっている。そうすると、子どもたちに教えることと、大学生に教えることでは、全く違うので、そういう時に大学生としての学びがあり、コミュニケーション力、技術力がアップする。知識を教えるっていうのは最上級だ。私も教員になってから、1行でも自分で理解していないものは、プレゼンテーションの資料に入れられない。授業のために10倍の時間を使って作り、授業に臨んでいるという状況だ。他の学生たちが子どもたちに教える時、後輩に教える時に、同じように勉強している。そういうことがちょっときっかけになると、いいのではないかと感じている。

(田中会長)

何か、上の階層を跨ぐような学習機会。先ほどの体育の「函館スタイル」の話でもあったが、それが高校、中学、小学校、全部越えるようなものになれば。

(大場委員)

そういう意味では、越えたり、その近場で上と下、あるいは飛んだり。

(田中会長)

大・小っていうのが、あった。大きくジャンプして。

(大場委員)

プロジェクト学習を3年生では横でやっているが、その場合は喧嘩したりすることがある。そこでいい競争に発展すればいいのだが、言うこと聞いてくれないと言って、教員に助けを求めることが多い。まずは自分達で解決しろとか言うが、それよりも、上下関係があって、先輩・後輩の方がうまくいく感じだ。

(田中会長)

要は学習の環境だ。

我々の課題のまずひとつ、学習の環境どうするべきかという問題になるが、多分、社会の企業とか、そういう経済システムの中ではそういった環境が築かれている。On-the-Job Trainingなど。こういった要素は、教育の中にも入っていないと。

(大場委員)

OJTですね。

(田中会長)

階層を超えるインターンシップなどもだ。竹内委員は、そういう企業社会の中にいらっしゃるが、今、教育の中にそういったものが入っていかなければいけないという話だが、いかがだろうか。

(竹内委員)

大場委員がおっしゃった、大学生の方が、地域なり、学校以外の場、例えば小学校、中学校というのも、学生からみれば、社会の一部だと思うが、大学から外に出て、大学でインプットしたものを地域にアウトプットするとか、またはその逆で、地域からインプットしたものを、学校でアウトプットするとか、そういったことが非常に重要だと思う。前回の会議から申し上げているとおり、大場委員がおっしゃった、地域貢献と教育を結びつけるというのが一番大事だと思っており、その方法でアウトプット、インプットしながら、社会性を結びつけるというのは、すごく重要だと思っている。

例えば、自分が働きはじめ、その職業のことが初めてわかるというのでは遅すぎると思う。今の子どもたちは、サービスを受けるのは当たり前というところで育ってしまっており、例えば自分がホテルの従業員などになった時に、「ああ、こんな辛さがあったんだ」という気づきが、もう少し、子どもの頃なり、学生なりの時に分かるよ

うな教育があってほしいと思っている。周りに感謝をしながら、育つというようところで、函館の郷土愛というのが生まれてくるのではないかと思う。質問の答えとは違う感じかもしれないが、そのように思ったところだ。

(田中会長)

函館商工会議所では、「はこだて検定」にずっと取り組んでいらっしゃる。

結構、ちょっと失礼かもしれないが、年配の方々がチャレンジしているというのが、すごく多いと感じるのだが。

(竹内委員)

まさに今、作問を専門の先生方をお願いしており、11月の検定試験に向けて、準備を進めている。一番受けられている方は40代、50代の方が多いが、その次に多いのは60代の方、リタイアされた方々がさらに函館のことを学ぶという方が非常に多い。残念ながら、検定試験の内容が少し難しいためか、学生の方は少ない。中学生、高校生には内容がかなり難しく、「はこだて検定ジュニア」みたいなものを作ってくれと言われるが、試験問題を3段階に分けることはかなり繁雑であり、今はまだできていない。

講習会とかでも言うのだが、知った知識、例えば「五稜郭、一周が1.8キロメートルです」とか、「桜が1,600本だ」とか、ぜひ試験対応として周りの方に、ご自分の周りの方に吐き出すことによって、自分の知識が確かなものになるので、という話をさせていただいている。そういった方たちが、先程、大場委員もおっしゃっていたが、自分の言葉でコミュニケーション能力をとっていただくことが、すごく重要だと思っており、「はこだて検定」もその一つのツールになればいいなと常々思っている。

(田中会長)

海外の小学校過程の教育では徹底的に地域学習をやる。地域の地理とか、どんな偉人がいて、その地域の開発に貢献したか。徹底的にやろうと言う。その知識は、その地域でしか通用しないかもしれないが、果てしなく、限りない地域への愛がそこで生まれてくる。

小学生や、ひよっとしたら幼稚園の子ども時代から、ジュニアのジュニア検定みたいなものを作ってもらい、骨格的な重要な鍵になるような知識を、幼児教育の段階から函館スタイルの教育として歴史教育としてやる。これは、ひとつの函館の学びのス

タイトルだと思う。

(竹内委員)

検定合格者の会と言って、実質は上級合格者の方が運営している会だが、その方たちは函館のこと話したくて話したくて仕方がないという方たちだ。実際にジュニア検定の実施は前々から言われていて、私もこういった立場にもなったので、そろそろ本格的にと思っているが、確かにそれを通じて子どもたちに郷土愛を持ってもらうために、お役に立てるのであれば、本当に前向きに考えたいと思っている。函館には、知れば、高田屋嘉兵衛とか、子どもたちが実際に「はこだて検定」に臨むと、先人がこんなことまでやったんだというところは、郷土愛を育むのには役立つのかもしれない。

(大場委員)

より効果的にするには、子どもたちにいろいろ調べてもらって、検定試験を作ってもらおう。作問するというのいいのではないかと。チームで作問5問つくるとか。そうすると、簡単な問題や、難しい問題、いい問題とそうじゃない問題が出てくる。その辺をコメンテーターじゃないが、上級者のコメントとかももらう。そうすること自体がアクティブ・ラーニング的になる。

(田中会長)

コンクールみたいな。

(大場委員)

コンクールで。そうすると、競争となってよい。

(田中会長)

函館を愛する心がそうやって育まれて・・・

(大場委員)

函館はだいたいイベント好きだ。そういう方法もあると思う。

(田中会長)

今、アイデアが1つ出てきた。

(山田委員)

「はこだて検定」ができたのは、いつくらいか。

(竹内委員)

今年11回目だ。

(山田委員)

始まった頃は、当時の教育長が、クラブなどで子どもたちに「はこだて検定」を取り組ませてみてはどうだろうか、というようなこともあった。ところが長続きしなかった。内容的に難しかったのかどうなのかはわからないが、私としては、小学生にはハードルが高かった感じを受けている。小学生が函館のことを知るのは小学3年生からだが、その発達段階に合わせたような問題なり、作問という話もあったが、結構、総合的な学習の時間などで函館のことを学ぶ時間もあるし、それから修学旅行等で青森行って、函館をPRしたりするというようなことを実践している学校もある。

(大場委員)

いいですね。

(山田委員)

逆に、函館に来た方々にPRしようとしても、函館に来た人の方々が詳しい。来る前にもう下調べして来るので。

いずれにしても、総合的な学習の時間などをうまく活用しながら、教育課程の中の学習を作り上げることは可能であるとは思っている。

(大場委員)

ゲーム仕立てにする。札みたいなものを作って問題を書き、裏に答えが書いてある。そのようなものを読み上げてみたりというのを実践してみるのもよいのでは。カルタ的なものを、例えば、大学生と子どもたちが一緒になって考えて、プロトタイプをつくる。それをソフトウェア、アプリケーションにするということも面白いと思う。

函館を題材にしたアプリケーションをつくる、ゲームをつくるということだ。

(田中会長)

歴史は、我々が簡単に作ることができないので、最大の財産だ。

したがって、地域の多様性における最も重要なリソース、知恵として考えていかなければならない。函館スタイルの教育があるとすると、函館の歴史教育には1つのフォーカスが当たるのかもしれない。それが実現するような教育環境を作っていくが大事である。例えば、先ほどコンピュータサイエンスの話があったが、プログラミングを小学生でも取り組んでいくという流れにあって、私は、学童保育所で是非こういうことに取り組んでもらいたいと思う。学童保育所に通っている家庭の子どもたちは、両親が共働きであるので、決して余裕のある家庭とは思えない。そういう家庭が増えており、これからも増えていく可能性は十分にある。学童保育所などで非常に楽しんで学べる場があると、集中力のない子どもたちが夢中になる。もちろんプログラミングだけではなく、スポーツなどいろんな仕掛けが学童保育所などにあるといい。

(竹内委員)

貢献できるのであれば、「はこだて検定」は、私どもの商工会議所が主催でやっており、ある程度、柔軟に形を変えていくなり、加えていくことができるので、今後やっていけるものだと思っている。

私は教育の素人なのでそれを踏まえて聞いてほしいが、多様性をどうやって受け入れるかということにおいては、あんまり意欲がないといった子どもたちであっても、勉強以外のところなど何か得意なところがあるのを、先生以外でも、親でも、友達でも、誰かが認めてあげるといった環境が必要ではないかと思う。子どもたちは、何かひとつには興味があって、それについては認めて欲しいというところがあるんだと思う。それに対して、周りの方が気付く力というか、そういったものもあると、学校に行きたいという意欲にもつながって、結果的に勉強の方にもつながっていくのではないかと考えている。個性というか、何か子どもたちの得意な事を勉強以外の所でも認めてあげるといったことが大事なのではないか。

(大場委員)

大学でもアスペルガー発達障がいの子が少なからずいるが、プログラミングですとか、成績とか、ものすごくできる。でも、先程おっしゃられたように、コミュニケーションのみ、めちゃくちゃ駄目な状況である。チームでやる時、二人ペアになさっていったら、もうしゃべらない。でも成績はいい。そして、困ってしまうのは、自分のトラブルが起こった時に、騒いで、学校中に響き渡る声でわめいちゃったりする。それは、大人でもいると思うが、そういう子どもたちは、こだわりが必ずあ

るので、自分が思ったようにいかないケースでそうなることが多い。そのこだわりを周りが理解して、そうならないようにする。その対応方法として、私、実は研究でちょっとやっているのだが、学生がやりはじめると、それをビデオに撮っておき、後で客観的にそれを見させるということだ。そうすると、こうなってかっこ悪いなと思うので、しなくなることがあったりする。それは一例だが、学童保育所なり、学校なりで、どのように対応をしていくかなど、事例集を作ったりすることもいいのではと思う。

最近Facebookで見つけたものだが、とにかく覚えられないので、iPadを使って、いろいろなものを写真に撮ったり、覚書をするなど、それによっていろんなことができるようになってきた、というような事例があった。ICTをうまく利用することができるという事例であり、そういうことは各学校でチャレンジしていいんじゃないかと思う。他の子から見たら、1人だけiPadを使っているのはおかしいでしょうという話になったときには、この子は、こういう事情でこれを使っているんだということがわかるようにして、みんなを納得させるような事例もあり、すごくノウハウがあるので、それだけそういう子どもが増えているのであれば、函館市として全体的にそういうアイテムを導入していくのも、うまくいくのであれば、チャレンジするのも意味があるんじゃないかと思う。特別支援学級に限定して対象とするのも良いかもしれません。そういうことに対して未来大学として、アプリケーションをつくるということに対しては貢献できると思う。高校生と一緒にやったり、中学生と一緒にやったりということもできるかもしれない。観察していきながら。それを卒業研究にするっていうのも全く問題ない。

(絹野委員)

先程、アクティブ・ラーニングの話が出てきた。協働的なコミュニケーション能力もアクティブ・ラーニングの要素としてあると思うが、函館市の現状として、アクティブ・ラーニングの導入がどの程度進んでいるのかというのを、私は、もう退職してからだいぶ経つので、ちょっと知りたい。

(田中会長)

これは事務局に説明をお願いしたい。

(事務局・寺本教育指導課長)

函館市では、28年度と29年度で、次期指導要領の実施に向けた「アクティブ・ラー

ニング推進事業」というものを進めており、アクティブ・ラーニングを前もって学校の方に広めていくという取組を、2年間に渡って研修授業を進めているところだ。

各学校の先生方にも2年間の中で必ず推進事業の研修の方にも参加していただくように呼びかけているところだ。我々、要請訪問等で各学校の授業等も見ているが、大半の学校で、言語活動の充実は現行学習指導要領でも謳われているので、アクティブ・ラーニング的な授業というものは実践されている。子どもたちが一緒にペア学習であるとか、グループで話し合ったりとか、形は様々だが、子どもたちが対話的に協働的に学ぶような場面を取り入れるような授業は、各学校でそれぞれ実践されているというように我々は捉えている。その上で、28年度と29年度の中で、さらにそれが浸透していくように今、取組を進めているという状況である。

(田中会長)

今、函館市の中では、アクティブ・ラーニング研究会、アクティブ・ラーニング勉強会というのがあるのか。

(事務局・寺本教育指導課長)

研究会・勉強会という形ではなく、推進事業という形で進めており、その中で、今年度は20の研修を計画しており、多くの先生に参加いただく予定だ。算数・数学と道徳、それと外国語活動の3つの柱で、著名な講師の先生にも複数回、それぞれ函館に来ていただき、先生方にいろいろお話しをいただいたり、授業を見ていただいたり、助言いただいたり、その講師の先生方にも実際に授業をしていただくなど、そのような機会を設けながら今年度進めている。

(田中会長)

ありがとうございました。そろそろ終了予定の時間が近づいてきたので、今日議論できた子どもたちの資質や能力を伸ばすための教育環境の問題、個性が認められるような。私どもの特別支援学校の生徒さんで、障がいをもっているが、美術・絵画の特別な才能をもってる子どもがいて、いろいろな場所で展覧会を開き、大変好評だ。そういう個性が伸びてくるような機会が必ずどこかで必要だ。これをどう確保するか。今日はまだちょっと充分議論ができていないところであると思う。さらに、2つ目の観点で、地域づくりの支え手、担い手をどう育むか、画期的な方策はないだろうかということ、今、アクティブ・ラーニングの話にもあったが、英語ではとても成績が伸びているという話や、函館市も今、推進事業として取り組んでいるところであ

るので、これは、たぶんいろんな芽が出てくると思う。今、アクティブ・ラーニングが重要であるという中に、学び方の学びっていうのがある。メタ認知的に、どう自分で自分の学びを進めていくのかというか、OECDのキー・コンピテンシーの中に熟慮というものが出てくる。鍵になるのは、深く深く考えていく、熟慮する、そういう人間を育てることである、と言われており、その中に学習、全ての学習過程に自分で責任を持つということが書かれている。ということは、自分の学びは自分で設計していく、これは知的な人間としての自立であるということが明確に書かれているということになる。そういう学びの学びが進められるような、そういう今のアクティブ・ラーニングというキーワードがあるので、それを「函館スタイル」、ひとつ体育の分野でそういう取組があるので、様々な分野、理数や歴史教育など様々なジャンル、教育分野で「函館スタイル」、学び方を学べるような、そういう「函館スタイル」構成していく。これが函館の教育スタンダードになると、とても素敵なまちになるだろうというふうに思ったところだ。

最後に、先生方、言い漏らしたことがあれば、次回の会議にもつながるので。

(山田委員)

今日の資料の中で、就学援助の割合が他市に比べて高い、これは、ここ数年で始まったことではない。そこで、その要因として考えられるものって何なんだろうと今、思っている。共働きになると、学童保育所の需要が出てきて、家庭での家族と過ごす時間が少なくなる。当然、家庭学習も目が届かない。生活リズムも崩れる。昔からこの函館はこの就学援助云々と言われている。いったいそれは何が原因なのか、何がいけないのかっていうのをちょっと感じるもので、もし何か知っていることがあれば、お願いしたい。

(大場委員)

ひとり親家庭の割合が高くないですか、函館および北海道って。私は首都圏から来たとき驚いた。その割合がちょっと知りたいです。

(柴田学校再編・計画担当課長)

はい。高いです。

(大場委員)

高いですよ。そうすると、やはりこういう結果になる。働いているわけだから。

(山田委員)

夜もお母さんがいないですからね。

(大場委員)

いないということですね。それはひとつ大きな課題かな。

(竹内委員)

加えて平均賃金も低い。他都市と比べて。札幌と比べて低いのはもちろんだが、例えば帯広とか室蘭などに比べても数千円で低い。したがって、地域に繋がらないという原因にもなっている。

(大場委員)

結果的に進学率も低くなってしまう。早く働かなきゃいけないという状況に必然的になるわけであるから。

(田中会長)

働き手になるということだ。

(大場委員)

それを変えていくということも厳しいところがあるが、一方では支援の問題もある。

(田中会長)

非常に重大な課題だと思う。母親の支援と、母子家庭のお子さんの支援の課題。

(大場委員)

それはたぶん、鶏と卵なんじゃないかなというふうを感じる。要は、一人で女性が早い時点で自立するのは難しい、女性の自立は難しいので、早く結婚する。その結果、離婚率が高くなる。要は、自我が芽生えてきた時に、我慢ができないとか、一緒に添い遂げられない。本来結婚すべき相手と会えなかったとか、早く結婚した結果、うまくいかなくて離婚してるんじゃないかと、私はちょっと仮説としてもっている。沖縄も同様だ。高学歴であれば、きちんとした仕事につける。そうではないので、生

活するために結婚する。その結果、早く離婚するという、そういう悪いスパイラルになっているのではないかなと想像した。そこを、少しでも学んだことによって、きちんと収入を得られる職業に就くような道筋を立てることが1つの目標ではないだろうか。

(田中会長)

そのスパイラルどこかで絶たなきゃいけない。

(大場委員)

絶って、正のスパイラルにいく道筋をつくる。ここでの目標の1つかなと。

(田中会長)

子どもを支援し、子どもの学歴を上げることで、その母親を支援することになる。どういうところに照準するかというところは今後考えていかなければいけない。

(大場委員)

必ずしも大学に行くのがベストとは思わないが、その結果、安定的な収入を得られる職業につけると思うので、そうなるよう、道筋を作っていくことを考えていければいいと思う。

(田中会長)

今回は、その社会的な問題も考慮しながら、今日は多様性の問題ということだが、たぶん今日1回では終わるようなシンプルな問題ではないと思っているので、これからも繰り返し繰り返し、その都度、そういう議論もする場面に戻ってくると思う。

時間が迫ってきたので、一言ずつ何か、1分くらいでもいいので、いかがでしょうか。今、山田委員から伺ったので、齊藤委員から。

(齊藤委員)

先程、大場委員がおっしゃったことを、少し「函館スタイル」と絡めてお話ししたいと思う。

ICTでつなぐというところは、今後「函館スタイル」になってくるかなと思う。今、モデルとして、附属小学校では、全校で40台のタブレット端末、附属中学校は1人1台、120台のタブレット端末を整備しているので、ICTでつなぐということを考

え、幼稚園でも導入し、現在使用している。現在の使い方は、まず自己成就感や達成感を得るために、ゲーム的なものなどで、まずは親しむことに主眼を置いている。今回の協議会のテーマが、多様性ということで「はこだて検定」の話があったが、地域でつなぐというのはとてもいいことだと思う。その中でコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が磨かれていくのではないかと思う。

附属幼稚園においては、小学校から学習する生活や総合に向けてつながっていくための学びの基盤をつくるという意味で、年長さんではiPadを使って、たとえば何かを見つけて写真をとったり、何か録音をしたりして見たり聞いたり、それをつないで、何かを表現してみようというところに挑戦しようということを今行っている。これはあくまでも、どこでもできるものではないと思うので、ひとつのモデルとして、やってみようと考えている。

これからの時代を見据えたときに、函館の教育として、ICTでつながるといふ何かの方向性があるのもいいと思う。

(田中会長)

中島委員。

(中島委員)

大学生と小学生とか、中・高とか、高・大とかよく言われるが、やはり異年齢との関わる機会が、函館は非常に少ないのではないかと感じを思っている。例えば高校であれば、中学校あるいは大学との連携というのは結構やっているが、もう少しそういう機会を増やして、色々な形での連携をもっと増やすと、さらに良い意味でつながってくるのではないかという気がする。

(田中会長)

井上委員。

(井上委員)

大場委員の小・中・高と大学生が関わることで、大学生もまた勉強になるし、小学生などにも良い影響があるという話に関わっては、函館市でもいろいろなところで科学を学ぼうとか、大学生とここで遊ぼうとか、そういう場がたくさんある。しかし、意識の高い親はそこに連れていくが、全然興味の無い親の子どもは全く行く機会がない。そう考えると、公立の学校のカリキュラムはがちり決まっていると思うので、

そこにどう入っていくかというのは私にはわからないが、学校に来ていただくのが、子どもたち全員が触れることができるので、私はいろんなところでやるよりも、学校にそうした時間をきっちり作って、大学生と触れ合う時間があるといいのではと思う。

多様性という観点では、今、東京大学で、不登校の生徒などの中にも、科学の分野で、世界的なレベルの生徒などを集めたプロジェクトがあるというのを知って、不登校の子を、ただ学校に引っ張るというだけではなくて、一人一人がもった個性を大事にする社会になればいいと思う。

(田中会長)

Gifted educationと言うことがある。非常に天賦の才能を持っている、特別な才能を持っている子どもたちのための教育というのが、海外では注目されている。そういったものも多様性の1つかもしれない。大事だ。絹野委員。

(絹野委員)

いろいろとお話を聞く中で、非常に厳しい条件下に子どもたちが置かれている割合が、函館は高いんだなど、そういうことを少し感じている。ただ、やはり、主体的に学ぶ楽しさだとか、やり遂げた喜びを是非味わうような、そういう教育を受けさせてほしいと、考えているところだ。

(田中会長)

竹内委員。

(竹内委員)

先程、「はこだて検定」の話をしたが、今、直近でまた「はこだてカルチャーナイト」、地域の職業、親子連れで見ていただくという、青年部中心でやる事業がある。こういった事業をやるときに、パンフレットを作って、学校にうちの職員が回ってとか、教育委員会に配ってくださいということで進めている。それはそれでももちろんやるが、できればこういったイベント、子どもたちを対象にしたイベントが学校の先生・児童・生徒・保護者に直接伝わる仕組みが何かあればいいと思う。「はこぶら」ではないが、ここを見ればもう学生さんとか、学校の先生に見ていただけるような、ツールがあればいいと思う。直接行って配るのと、ポストに投げ込みをする以外に、こういう時代であるので、サイトなど何か置き場所があってほしいと思う。経済と学

校をつなぐツールということ。

(田中会長)

視覚で学校をつなぐということか。

(竹内委員)

はい。

(田中会長)

大場委員。

(大場委員)

私としては、個性を伸ばす教育、それには2つあると思う。1番上をつくって、1番下に対応する。ダントツ1番を育成する教育と、あと正のスパイラルにもっていくため、底辺の環境の子どもたちを救うための教育、この2点ができれば、結構、函館市の教育が底上げできるどころか、世間に注目されると思う。ランキング1番をたくさんつくる。芸術の世界を中心に世の中にはものすごく活躍している人がいる。そういう人をどんどん増やしていく。個性を伸ばすことによって増えていくと思うし、それによって負のスパイラルも底上げできるんじゃないか。各自の良い所を自覚させてあげるような教育で、そうすることで頭一つ出る。ダントツ1位。そういう道筋を付けることが、ひとつの解ではないかと漠然と思っている。

(田中会長)

毛利副会長。

(毛利副会長)

皆様のご意見をいろいろ聞いていて、悩んでしまう。

まず、竹内委員から出た、認められるとか、褒められるというキーワードと、それから山田委員から最後の方に出た、誰が一番認められたいかっていうことについては、子ども、親だと思う。そこが根本的になれば、話は始まらないと言ってしまったら、元も子もないが、生まれてきて親に認められている存在だということが、まず根本にないと、一切、話は進まないような気がする。例えば、経済的になかなか厳しい環境にあって、子どもと接する余裕さえ失っているような家庭があったら、それに

手を差し伸べるようなことが必要だ。これが教育環境の整備だと思うので、そこは函館市として、あるいはこういう協議会においても話していかなければならないのかなというのをひとつ感じた。

それから、絹野委員から、主体的という言葉が最後にもう一回念を押して出てきたことに、私は、学校でもっと何かやれることがあるんじゃないかと言われているような気がした。私の生まれ育ちは函館だが、昔、函館は優秀だった。北海道の中でも札幌に次いで2番手3番手というような感じが、いつのまにか落ちてきている。そういう状態にいつなったんだろうと、よく感じ、考える。それでも、学力・学習状況調査のデータは上昇傾向にはある。傾向としては、復活の兆しはあるが、絹野委員が期待するところまでは、もう少し時間がかかりそうだと、私は現場にいて思っている。事務局から今の函館の進み方を言ったように、アクティブ・ラーニングが全てじゃないが、子どもたちが学ぶ意欲を感じられるような環境を作らなくてはいけないんだなと、今日ご意見を聞いていて思った。

3つ目の話をすると、今日、学童保育の話がでたり、それから大学と小学生が連携したりという話が出た。いわゆる学校でない、フォーマルでない場の、インフォーマルな場の子どもの繋がりや、学校の先生でない人たちとの繋がりなど、そういう場をもう少し作っていけないんだろうかということをしごく感じたので、そこに対して函館市として何か手立てが欲しいと思う。学校で頑張り、家庭で頑張るという時代ではもうない。もっとトータルして、自治体として、地域としてやれることに次々手を打たないと。誰かのせいにしてたって、どっかの環境のせいにしてたって、どうもこうもなんないと思う。だから、そういうことをもう少しこの協議会でも函館市でも、話に宿っていればいいのかなと思った。そういう環境をたくさんそろえたら、本当に多様な状況に対応していけるのではという気がする。学校の、四角四面の、カリキュラムが感じがらめの、時間が感じがらめの中では、やはり限界は感じているところだ。

(田中会長)

学童保育所にいる時間は生かせると思う。でも何をやっていいのかわからないというのが現状のようだ。

(毛利副会長)

そこに、なんか面白いプログラムが入ればいいのかなと、ということを感じ、話を聞いていた。

(田中会長)

すごくもったいない。何をやっていいかわかりませんということは。時間を持って余している。僕はそういうふうに思った。子どもたちは学生のこと大歓迎だ。夢中でスポーツやるし、ゲームやるし、遊んで大学生から離れない。そして、それはいい教育機会になる。私は何とかきっかけを作り出したいと思っている。

時間となったので、議事(1)はこれくらいでよろしいか。あとは事務局がこれをうまくまとめていただければと思う。大変恐縮ですけれども、よろしくしたい。

議事(2)について、事務局からお願いしたい。

## (2) その他

(事務局)

第3回の会議の日程は10月中の開催予定となっており、委員のみなさんと日程調整のうえ後日案内する。

(木村学校教育部長)

本当に今日はどうもありがとうございました。始まった頃は大変夕陽がきれいで、もう真っ暗になったが、本当に、この函館で育つ子どもは、そういう環境だけでなく、いろいろお話しあったが、学んでいた、そういう小さい頃の原風景を忘れず、そして楽しかった、良かったという思いを、しっかり持ってもらい、やがては函館を離れても、心のどこかは函館を思う。そういう大人がたくさん増えてほしいと、皆さんの話を聞いて強く感じた。今日は、キーワードもたくさん出て、私なりに、やはりこの場は、教育振興基本計画を策定する、そういうような計画に結びつけるような、キーワードを拾いながらということで聞いていたが、例えば、キャリア教育、キャリアという言葉は直接出てこなかったが、すごく出てきた。それから、ふるさと学習ですか。これも出てきた。それから、国際観光都市函館ということで、外国語教育ということも当然出てきたし、それから特別支援教育。これはヘレン・ケラーがこの地に降り立っているという意味でも、特別支援教育は大事にしなければならない。そして、子どもの姿としては、主体的な学び、主体的に学ぶというキーワード。ツールでは、やがてはICT教育という言葉すらなくなるくらいの勢いだが、今後ICTは定着していくので、普通に函館の幼・小・中・高・大のどこでも使いこなす、使われていくということが、きっと出てくるのだろうなと思っている。それがとりあえず、学校教

育の分で、もっと話は大きく、周辺の学童の話とか、いろんなフォーマルでない所でのつながり。非常に私ども事務局にとって計画策定する上で、キーワードをたくさんいただいたということで、また今度、今日も出てきたが、縦のつながりということが、今度のキーワードになるので、次回も楽しみにしたいと思う。

本日はどうもありがとうございました。

(田中会長)

それでは本日2回目の協議会を終了させていただく。ありがとうございました。

### **3 閉 会**